

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	『エッセー』1598年版に関する一考察：綴り字の側面から、1595年版との比較
Author(s)	奥村, 真理子
Citation	フランス文学, 27 : 16 - 27
Issue Date	2009-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041096">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041096</a>
Right	
Relation	



## 『エッセー』1598年版に関する一考察 —— 綴り字の側面から、1595年版との比較 ——

奥村 真理子

### はじめに

文学研究において〈どのテキストに依拠すべきか〉という問題は根本的問題である。しかし今、『エッセー』研究全体に関わる基盤が大きく揺れている。

本稿は、20世紀の末まで疑わしい異本と見做されていたが、近年再評価の声が高まっている、いわゆるグルネ嬢版『エッセー』に関して、初版である1595年版<sup>1)</sup>について筆者が2007年に行った考察<sup>2)</sup>に続き、第2版である1598年版<sup>3)</sup>について一つの考察を試みるものである。

モンテーニュが生前に出版した『エッセー』の最後の版は1588年版だが、彼は1592年に没するまで『エッセー』の増補修正を続けた。著者と親交のあったグルネ嬢は、彼の死後モンテーニュ夫人の依頼で遺稿を印刷に付した。かつては、そのテキストがモンテーニュの『エッセー』の最後のテキストだと信じられていた。しかし20世紀初頭、著者が増補修正を書き込んだ1588年版(ボルドー本)の校訂版を出したストロウスキが、1595年版のテキストの、ボルドー本のテキストとの夥しい数の違いのほとんどが誤りか改竄だと断定した<sup>4)</sup>。これによってボルドー本の特権的権威が確立し、1595年版は失墜した。ボルドー本には〈モンテーニュの肉筆〉という物証があるが、グルネ嬢版にはそれがないからである。さらに、グルネ嬢称讃の一節がボルドー本にはないからグルネ嬢の捏造だ、ならばほかにも改竄をしたに違いない、と見做されたのである。以後、大方の研究者たちがこの見解に従うこととなった。

これに対する近年の1595年版再評価の論は、1595年版が、〈ボルドー本とは別で、それより後の増補修正が施された、失われたモンテーニュの加筆本〉に基づいているというものである<sup>5)</sup>。その詳細をここで紹介することは紙幅の制約からできないが、たとえば、疑惑の大きな論拠であるグルネ嬢称讃の一節に関しては、次のような疑問が提出されている。グルネ嬢は1595年版の出版後、モンテーニュの城館に招かれて長期滞在し、改訂版準備のために1595年版に誤植訂正を書き込み、リプシウスやプランタンなどに送った。グルネ嬢称讃の一節には、「もはや私はこの世で彼女しか見ていない」« Je ne regarde plus qu'elle au monde »<sup>6)</sup>という誇張的表現まである。もしもグルネ嬢が捏造をしたのであれば、宮下志朗氏の表現を借りるなら、「未亡人の待つモンテーニュの城館にのこのこでかけていくだろうか」<sup>7)</sup>という疑問である。

しかし、1595年版への疑惑が払拭されたわけではない。たとえばトゥルノン氏は、1595年版はモンテーニュがボルドー本に書き込んだ独特の分節法を無視していると警鐘を鳴らし<sup>8)</sup>、ブルム氏は、グルネ嬢が当時の『エッセー』批判<sup>9)</sup>に対して『エッセー』を守るために善意から意図的に修正を施したのではないかと論じている<sup>10)</sup>。

グルネ嬢版のテキストの真正さの問題を解くには、彼女のモンテーニュの意思への忠実さと努力の検証が鍵になると言えるだろう。その方法として筆者は先の考察において、従来の研究者たちの方法論とは異なり、綴り字の側面から『エッセー』1595年版に関する調査考察を行った。この考察では、1598年版の綴り字調査をそれと比較し、さらにこれらとほぼ同時期に出版されたグルネ嬢の作品の場合と比較する。

## 1. モンテーニュの綴り字に関する指示

モンテーニュは『エッセー』の中で綴字法について次のように書いている。

読者よ、他人の気まぐれや不注意からここにまぎれ込んでいる欠陥については私を責めないでほしい。めいめいの手とめいめいの職工がそれぞれに誤謬を持ち込むのだ。私は綴字法については干渉せずに、ただ、古い綴字法に従うように命じるだけである。句読法についても同様である。この二つのどちらにも明るくないからである。彼らの手で意味がすっかりこわれても私はあまり気をもまない。なぜなら、少なくともそれは私の責任ではなくなるからである。[…]私がいかに勤勉でないか、いかに自己流儀を通す人間であるかを知る人は、私がこんな子供じみた訂正をするためにこの「エッセー」を無理に読み返すくらいなら、むしろ同じ量の「エッセー」を新しく書き直すだろうということを容易に信じてくれるであろう。<sup>11)</sup> (下線は筆者)

ところが、モンテーニュはボルドー本の扉の裏ページには、「古い綴字法に従うように」という指示とともに、綴り字に関する具体的な指示を5項目記している。便宜上番号を付して、その内容を以下に記す。[ ]内は後世の製本時に裁断された文字の推定、〔 〕内は筆者による補足である。

- 1° *monstre*、*monstreus* と区別して、sなしで[*mon*]tre、*montrer*、*remontre*などに。
- 2° *c'est*、*c'estoit* と区別して〔*cest*、*ceste*ではなく〕sなしで*cet*、*cette*に。
- 3° [この項目は狭義の綴り字からはみ出すかもしれないが、「*ainsi* は母音で始まる語の前ではnなし、子音で始まる語の前ではnあり」という規則と例が矛盾している。これはモンテーニュの書き間違いで、正しくは、同時代のパスキエのこの新しい語法に関する証言 (Etienne PASQUIER, *Recherches de la France*, VIII, 3)

にあるとおり、母音衝突をさけるために] 母音で始まる語の前では n あり、子音で始まる語の前では n なし。例えば *ainsi marcha*、*ainsin alla*。

4° g の前に i を入れて、*[cam]paigne*、*espaigne*、*gascouigne* などに。

5° *reigles*、*reigler* ではなく、*regles*、*regler* に。

「旧い綴字法」とは、16 世紀にルイ・メグレやペルティエ・デュ・マンが唱えた新しい表音的綴字法に対立するもので、大体においてロベール・エティエンヌが辞書<sup>12)</sup>で採用したようなものと推測される。しかし、具体的な指示の大部分がそれとは一致しない（下記 **Tableau 1** を参照されたい）。これらのほか、頭文字を大文字にする語は固有名詞だけか少なくとも統一するようという指示もあるが、本考察における統計調査<sup>13)</sup>の対象は、具体的に綴り字を指示された語に限定する。

## 2. 綴り字を具体的に指示された語の統計調査

### (1) 『エッセー』1595 年版の場合

上記の 5 項目に挙げられた語に関する 1595 年版『エッセー』における綴り字の統計調査結果は **Tableau 1** のとおりである。⑥と⑧以外は、方針がボルドー本におけるモンテーニュの指示と一致していると言えよう。

**Tableau 1 : L'édition de 1595**

	FORME RECOMMANDÉE PAR MONTAIGNE		FORME NON RECOMMANDÉE PAR MONTAIGNE	Cf. R. ESTIENNE
①	<i>montre / montrer</i>	88%	<i>monstre / monstrer</i>	<i>monstre / monstrer</i>
②	<i>remontrer</i>	100%	<i>remonstrer</i>	<i>remonstrer</i>
③	<i>cet</i>	95%	<i>cest</i>	<i>cest</i>
④	<i>cette</i>	70%	<i>ceste</i>	<i>ceste</i>
⑤	<i>ainsi</i> avant un élément consonantique initial / <i>ainsin</i> avant un élément vocalique initial	96%	<i>ainsi</i> + voyelle / <i>ainsin</i> + consonne	<i>ainsi</i>
⑥	<i>campaigne</i>	33%	<i>campagne</i>	<i>campaigne</i>
⑦	<i>espaigne</i>	75%	<i>espagne</i>	—
⑧	<i>gascouigne</i>	0%	[ « sans /i/ » ]	—
⑨	<i>regle / regler</i>	76%	<i>reigle / reigler</i>	<i>reigle / reigler</i>

④の *cette* と *ceste* の分布は特筆に価する。次のページの **Tableau 2** のように、第 1 巻全体と第 3 巻の前半の 6 割が同様の割合で、*cette* がほとんどを占めているのに対し、第 2 巻全体と第 3 巻の後半の 4 割が同様の割合で、*cette* と *ceste* が半々である。

Tableau 2 : *Cette et ceste* (l'édition de 1595) -a

	<i>cette</i>	<i>cett'</i>	<i>cet'</i>	<i>ceste</i>	TOTAL
☞ Livre I	421 (96%)	5 (1%)	1 (0.2%)	10 (2%)	437
☞ Livre II	407 (51%)	12 (1%)	3 (0.4%)	383 (48%)	805
Livre III	396 (77%)	4 (1%)	2 (0.4%)	111 (22%)	513
TOTAL	1224 (70%)	21 (1%)	6 (0.3%)	504 (29%)	1755

Tableau 2: *Cette et ceste* (l'édition de 1595) -b

Livre III	<i>cette</i>	<i>cett'</i>	<i>cet'</i>	<i>ceste</i>	TOTAL
☞ pp. 1-138	289 (97%)	3 (1%)	2 (1%)	3 (1%)	297
☞ pp. 139-231	107 (50%)	1 (0.5%)	0 (0%)	108 (50%)	216

さらに、第2巻全体と第3巻の後半における *cette* と *ceste* のページごとの数を調査すると、若干の例外はあるが、ほぼ 12 ページ周期（部分的に 6 ページおよび 4 ページ周期）で *cette* が支配的なページと *ceste* が支配的なページが交替している。

このような分布と周期的交替は、1595年版の印刷工程に由来していると考えられる。1595年版は二つ折り判の挟み込み折丁で、原則として次のページの **Schéma 1** のような3枚折丁であり、ページ順の植字よりも印刷工程が速くできる composition « par formes »（組み版順植字）で植字されたと推定されている<sup>14)</sup>。また、始めの2巻を一つのチームが印刷し、第3巻をもう一つのチームが印刷するという、2チーム同時進行で印刷されたことが分かっている<sup>15)</sup>。**Schéma 2** は、第2巻の481ページから504ページの、ページごとの *cette* と *ceste* の数を forme（組み版）別に図にしたものである。第2巻全体と第3巻の後半における周期的交替は、このように、ある折丁では、外面の組版の左のページを言わば *cette* 派の植字工が、右のページを *ceste* 派の植字工が担当し、内面の組版はこの分担が左右逆で、次の折丁ではこれらの分担が前の折丁の逆だったことに由来すると考えられる。このような複数の植字工の分担によって、組み版順植字のスピードをさらに上げられる。実際、16世紀に、特に二つ折り判の挟み込み折丁で、この方法が採用されていた記録が残っている<sup>16)</sup>。

業者がこのように急いだことには当時の状況が大きく関与している。1593年に『エセー』の海賊版が出版された<sup>17)</sup>。『エセー』1588年版の版元である Abel L'Angelier は、『エセー』とその他の海賊版を告発する文書をパリ高等法院に提出して抗議し<sup>18)</sup>、9年間の国王允許がまだ切れていないのに翌年新たな国王允許を取得した。そして、推定<sup>19)</sup>によれば、1594年の暮れか遅くとも翌年の初めには『エセー』1595年版の印刷は終了した。したがって、2チーム同時進行も、筆者の調査で明らかになった複数の植字工の分担による組版順植字も、モンテーニュの遺稿に基づく増補改訂版を、海賊版への対抗措置として、早急に出版すべく採られた方法だったと考えられる。

Schéma 1 : Trois feuilles in-folio encartées

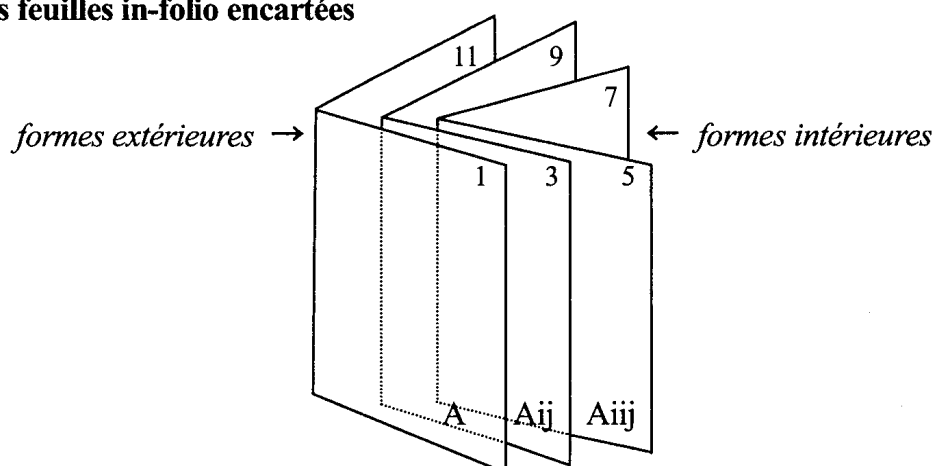


Schéma 2 : Composition « par formes »

<i>formes extérieures</i>		<i>formes intérieures</i>	
492 <i>cette 0</i> <i>ceste 0</i> 2S6v°	481 <i>cette 0</i> <i>ceste 3</i> 2S1r°	482 <i>cette 0</i> <i>ceste 5</i> 2S1v°	491 <i>cette 2</i> <i>ceste 0</i> 2S6r°
490 <i>cette 6</i> <i>ceste 0</i> 2S5v°	483 <i>cette 0</i> <i>ceste 3</i> 2S2r°	484 <i>cette 0</i> <i>ceste 2</i> 2S2v°	489 <i>cette 2</i> <i>ceste 0</i> 2S5r°
488 <i>cette 2</i> <i>ceste 0</i> 2S4v°	485 <i>cette 0</i> <i>ceste 5</i> 2S3r°	486 <i>cette 0</i> <i>ceste 4</i> 2S3v°	487 <i>cette 2</i> <i>ceste 0</i> 2S4r°
504 <i>cette 0</i> <i>ceste 5</i> 2T6v°	493 <i>cette 5</i> <i>ceste 0</i> 2T1r°	494 <i>cette 3</i> <i>ceste 0</i> 2T1v°	503 <i>cette 0</i> <i>ceste 1</i> 2T6r°
502 <i>cette 0</i> <i>ceste 1</i> 2T5v°	495 <i>cette 3</i> <i>ceste 0</i> 2T2r°	496 <i>cette 1</i> <i>ceste 0</i> 2T2v°	501 <i>cette 0</i> <i>ceste 3</i> 2T5r°
500 <i>cette 0</i> <i>ceste 3</i> 2T4v°	497 <i>cette 0</i> <i>ceste 0</i> 2T3r°	498 <i>cette 1</i> <i>ceste 0</i> 2T3v°	499 <i>cette 0</i> <i>ceste 4</i> 2T4r°

ところで、グルネ嬢は1595年版『エセー』の「序文」で、「*j'ay secondé ses inventions jusques à l'extreme superstition*」〔*inventions* は *intentions* の誤植〕と、著者の意思への細心なまでの忠実さを述べている。だがそれとともに、印刷の出来は不本意にも不完全だった、つまり誤まりが多かったことを読者に告白し、それを補うために、「おのずから分かるような些細な誤りを除き」*« sauf en quelques si legeres fautes, qu'elles se restituent elles mesmes »*、正誤表で訂正し、さらに、印刷された本にペンで書き込んだ幾つかの訂正を知らせている<sup>20)</sup>。彼女がいかに手間をかけたかが窺われる。

綴り字 *ceste* は「おのずから分かるような些細な誤り」の部類に入るだろう。当時、著者自身が印刷工房に詰めて校正をすることは稀だったらしいが、その場合、著者には校正の時間が十分与えられなかったようだ<sup>21)</sup>。おそらく、1595年版の印刷は予定どおりに捗らなかったために、後半はペースが上げられて校正の時間が一層限られたせいで、著者の代わりに校正をしたグルネ嬢は、「めいめいの職工がそれぞれに誤謬を持ち込む」なか、内容に関わる誤植の訂正を優先するために、*ceste* のような綴り字の訂正まで注意が行き届きにくくなったか、訂正を断念せざるを得なかったのではないだろうか。

## (2) 『エセー』1598年版の場合：1595年版との比較

では、これらの綴り字は1598年版ではどのようなようになったのだろうか。

特に注目に値するのは *cette* と *ceste* の数の変化である。1595年版の第2巻全体と第3巻の後半では、ボルドー本におけるモンテーニュの指示に反する綴り字 *ceste* が半数を占めていた。ところが1598年版では、Tableau 3<sup>22)</sup>のように、どちらにおいても〈指示〉と一致する綴り字 *cette* が大幅に増加して、第1巻全体と第3巻の前半と同様、支配的になっている。

Tableau 3 : *Cette et ceste* (l'édition de 1598) -a

	<i>cette</i>	<i>cett'</i>	<i>cet'</i>	<i>ceste</i>	TOTAL
☞ Livre I	418 (96%)	5 (1%)	1 (0.2%)	12 (3%)	436
Livre II	691 (86%)	12 (1%)	1 (0.1%)	103 (13%)	807
Livre III	489 (95%)	7 (1%)	0 (0%)	20 (4%)	516
TOTAL	1598 (91%)	24 (1%)	2 (0.1%)	135 (8%)	1759

Tableau 3 : *Cette et ceste* (l'édition de 1598) -b

	<i>cette</i>	<i>cett'</i>	<i>cet'</i>	<i>ceste</i>	TOTAL
☞ Livre III					
pp. 810-1121	292 (97%)	6 (2%)	0 (0%)	2 (1%)	300
pp.1121-1165	197 (91%)	1 (0.5%)	0 (0%)	18 (8%)	216

その他については1595年版と1598年版に関する統計を簡略化して一覧表にした。

Tableau 4 : L'édition de 1595 et l'édition de 1598

	FORME RECOMMANDÉE PAR MONTAIGNE ÉDITION DE 1595 ⇒ ÉDITION DE 1598 (%)			FORME NON RECOMMANDÉE PAR MONTAIGNE	Cf. R. ESTIENNE
①	<i>montre / montrer</i>	(88%⇒98%)	↑	<i>monstre / monstrer</i>	<i>monstre / monstrer</i>
②	<i>remonttrer</i>	(100%⇒100%)	=	<i>remonstrer</i>	<i>remonstrer</i>
③	<i>cet</i>	(95%⇒96%)	↑	<i>cest</i>	<i>cest</i>
④	<i>cette</i>	(70%⇒91%)	↑↑	<i>ceste</i>	<i>ceste</i>
⑤	<i>ainsi</i> avant un élément consonantique initial / <i>ainsin</i> avant un élément vocalique initial	(96%⇒92%)	↓	<i>ainsi</i> + voyelle / <i>ainsin</i> + consonne	<i>ainsi</i>
⑥	<i>campaigne</i>	(33%⇒17%)	↓	<i>campagne</i>	<i>campaigne</i>
⑦	<i>espaigne</i>	(75%⇒65%)	↓	<i>espagne</i>	—
⑧	<i>gascouigne</i>	(0%⇒0%)	=	[« sans /i/ »]	—
⑨	<i>regle / regler</i>	(76%⇒70%)	↓	<i>reigle / reigler</i>	<i>reigle / reigler</i>

Tableau 4 のように、①と③は、やはり〈指示〉と一致する綴り字 *montre / montrer* および *cet* が増加している。②は、総数が4で少ないのだが、〈指示〉と一致する *remonttrer* が100%のまま保たれている。⑤は、〈指示〉と一致する *ainsi* および *ainsin* が若干減少したが、依然として9割を超えている。また、⑦と⑨も、〈指示〉と一致する *espaigne* および *regle / regler* が減少したが、6~7割が保たれている。

しかし、⑥は〈指示〉と一致する *campaigne* がさらに減少し、⑧は〈指示〉と一致する *gascouigne* が0%のままである。⑥も⑧も総数が6で少ないのだが、ボルドー本におけるモンテーニュの指示とは別の方針があったのだろうか。あったとすれば、それはモンテーニュの指示による方針なのだろうか。それとも他者の方針なのだろうか。他者の方針だったとすれば、それはモンテーニュの指示を無視したからなのか、あるいはこれらに関してはモンテーニュの指示を受けていなかったからなのか。

いずれにせよ、これらのことから、別の加筆本が存在し、そこにボルドー本より後のモンテーニュの指示が記されていたのだとしても、少なくともこれらの語のほとんどについてはボルドー本における指示と同様のもので、グルネ嬢はそれに忠実に従うために、1595年版で不本意にも残ってしまった「おのずから分かるような些細な誤り」を、1598年版の製造過程で恣意性や「気まぐれや不注意から」新たに数々「まぎれ込ん」だであろう誤りとともに、訂正すべく努力したと考えられるのではないだろうか。



### 3. 比較事例：同時期に出版されたグルネ嬢の作品の場合

これらの比較事例として、ほぼ同時期の 1594 年に『エセー』1595 年版と同じ出版業者および印刷業者によって印刷出版されたグルネ嬢の作品、『モンテーニュ氏の散歩』<sup>23)</sup>の綴り字と、翌年に出版されたその第 2 版<sup>24)</sup>の綴り字の調査をこの考察に加えたい。

『エセー』1595 年版と 1598 年版、『散歩』の 1594 年版と 1595 年版は、版元と印刷業者の条件が似通っているので比較に値する。すなわち、版元はいずれも Abel L'Angelier であり、印刷は、『エセー』1595 年版も『散歩』の初版も Léger Delas である<sup>25)</sup>。他方、『エセー』1598 年版の印刷は、おそらく Pierre L'Huillier、あるいは少なくともこの業者が使っていた装飾模様を使用した工房で、いずれにせよ『エセー』1595 年版とは別の業者が請け負ったと推定されている<sup>26)</sup>。『散歩』の第二版のほうも、初版とは別の工房が印刷したと推定されている。Léger Delas と Pierre Ménier が使用していた装飾模様が使われているけれども、初版とはアクサンの使い方など綴り字が数々の点で異なるからである<sup>27)</sup>。

次のページの **Tableau 5** は、ボルドー本でモンテーニュが綴り字を指示した語の綴り字の、『散歩』に収められた作品別（便宜上番号 **i**~**iv** を付す）の統計である。

まず、1595 年版でも 1598 年版でも *montrer* が支配的な『エセー』とは対照的に、『散歩』ではどちらの版でも *monstrer* が支配的であることが目を引く。*monstrer* は、綴り字がまだ統一されていなかった 16 世紀に「綴り字参考書」として出版業界の賛同を得ていた<sup>28)</sup>ロベール・エティエンヌの辞書の綴り字と一致する。

また、*ainsi* および *ainsin* は、初版では、子音で始まる語の前はすべて *ainsi*、母音で始まる語の前は *ainsin* が 4、*ainsi* が 5 だったが、第 2 版では、子音の前でも母音の前でもすべて *ainsi* になった。これも「綴り字参考書」と一致しており、『エセー』の場合と対照的である。

さらに、*cette* と *ceste* の割合も注目に値する。初版において、**i** では *cette* が 2、*ceste* が 1、**ii** では *ceste* が支配的、**iii** と **iv** では *cette* が支配的である。16 世紀の書物の綴り字は、それぞれの植字工の気紛れや恣意性に左右されることが多かったが、これはその典型的な事例の一つと言えるだろう。また、第 2 版では、おそらくこれらに関しては植字工が初版の綴り字に機械的に従ったのだろう、大方が初版の綴り字のままであるが、2ヶ所で *cette* が *ceste* に、1ヶ所で *cette* が *cete* になった結果、*ceste* が若干だが増えている。『エセー』のほうは 1598 年版で *ceste* が大幅に減少し、全般的に *cette* が支配的になった。この点でも『エセー』と『散歩』は対照的である。

Tableau 5 : *Le Proumenoir de Monsieur de Montaigne* (l'éd. de 1594 et l'éd. de 1595)i : *A Michel Seigneur de Montaigne*ii : *Le Proumenoir de Monsieur de Montaigne, à luy-mesme*iii : *Version du second livre de l'Æneïde*iv : *Bouquet poetique, ou meslanges*

	FORME RECOMMANDÉE PAR MONTAIGNE / FORME NON RECOMMANDÉE PAR MONTAIGNE	ÉD.	i	ii	iii	iv	TOTAL
①	<i>montrer</i>	1594	0	0	1	0	1
		1595	0	0	1	0	1
	<i>monstrer</i>	1594	0	7	5	5	17
		1595	0	7	5	5	17
②	<i>remontrer</i>	1594	0	0	0	0	0
		1595	0	0	0	0	0
	<i>remonstrer</i>	1594	0	1	0	0	1
		1595	0	1	0	0	1
③	<i>cet</i>	1594	2	7	7	4	20
		1595	2	5	4	4	15
	<i>cét</i>	1594	0	0	0	1	1
		1595	0	2	2	1	5
	<i>cest</i>	1594	2	1	0	0	3
		1595	2	1	1	0	4
④	<i>cette</i>	1594	2	2	18	9	31
		1595	2	2	15	9	28
	<i>cete</i>	1594	0	0	0	0	0
		1595	0	0	1	0	1
	<i>ceste</i>	1594	1	46	3	0	50
		1595	1	46	5	0	52
⑤	<b><i>ainsi</i> avant un élément consonantique initial</b>	1594	0	9	14	12	35
		1595	0	9	14	12	35
	<b><i>ainsin</i> avant un élément vocalique initial</b>	1594	0	3	0	1	4
		1595	0	0	0	0	0
	<i>ainsi</i> avant un élément vocalique initial	1594	0	2	3	0	5
		1595	0	5	3	1	9
⑥	<i>campaigne</i>	1594	0	0	0	0	0
		1595	0	0	0	0	0
	<i>campagne</i>	1594	0	0	1	0	1
		1595	0	0	1	0	1
⑨	<i>regle</i>	1594	0	1	0	0	1
		1595	0	1	0	0	1
	<i>reigle</i>	1594	0	0	0	0	0
		1595	0	0	0	0	0

## 結び

以上のことから、グルネ嬢は『散歩』の印刷においては、初版でも第2版でも、綴り字の指示や訂正をしなかったと考えられるとともに、『エッセー』の印刷においては逆に、本考察の2で推定された、モンテーニュの意思に忠実に従うために、1595年版で綴り字の指示や訂正を出来る限りしたが、残ってしまった「おのずから分かるような些細な誤り」を1598年版で、新たに職人たちが持ち込んだであろう幾つもの誤りとともに訂正する努力をしたということが裏付けられたのではないだろうか。

狭義のテキストに関してこのような忠実さと努力があったのかどうか、それを検証するにはさらなる考察が必要である。数世紀に亘る単純な信用と一世紀近くの不信の時代を経て、グルネ嬢版『エッセー』に関する研究はようやく本格的に始まったばかりである。テキストの詳細な分析が必要であることは言うまでもないが、その際、本考察で明らかになった、当時の出版業者や印刷業者の事情と書物の製造工程とが及ぼす影響という側面も十分考慮に入れることが必要なのではないだろうか。

---

## 註

- 1) *Les Essais de Michel Seigneur de Montaigne*. Edition nouvelle, trouvee apres le deceds de l'Auther, reveuë & augmentée par luy d'un tiers plus qu'aux precedentes Impressions. A Paris, Chez Abel L'Angelier, au premier pilier de la grande salle du Palais. M.D.XCV.
- 2) 奥村真理子「『エッセー』1595年版に関する一考察——綴り字の側面から」、『広島大学大学院文学研究科論集』第67巻、2007、pp. 75-92。
- 3) *Les Essais de Michel Seigneur de Montaigne*. Edition nouvelle, prise sur l'exemplaire trouvé apres le deceds de l'Auther, reveu & augmenté d'un tiers outre les precedentes impressions. Virésque acquirit eundo. A Paris, Chez Abel L'Angelier, au premier pilier de la grand'salle du Palais. M.D.XCXVIII. [sic.]
- 4) *Les Essais de Michel de Montaigne*, publiés d'après l'exemplaire de Bordeaux par Fortunat Strowski, tome I, Bordeaux, Pech, 1906, pp. 461-464.
- 5) David MASKELL, « Quel est le dernier état authentique des *Essais* de Montaigne ? », *BHR*, 40, 1978, pp. 85-103 ; *id.*, « Montaigne correcteur de l'exemplaire de Bordeaux », *BSAM*, 25-26, 1978, pp. 57-71 ; Michel SIMONIN, « Aux origines de l'édition de 1595 », *Montaigne et Marie de Gournay*, Actes du Colloque international de Duke 31 mars-1<sup>er</sup> avril 1995 réunis et présentés par Marcel Tetel, Champion, 1997, pp. 7-51 ; Philippe DESAN, *Montaigne dans tous ses états*, Fasano, Shena Editore, 2001, pp. 69-120.
- 6) *Essais*, II, 17, éd. de 1595, p. 439.

- 
- 7) 宮下志朗「『エッセー』の底本について——「ボルドー本」から1595年版へ」、モンテーニュ『エッセー』1、宮下志朗訳、白水社、2005、p. 323。
  - 8) André TOURNON, « Le “bon ange” et le bon usage : Montaigne au purgatoire », *Marie de Gournay et l'édition de 1595 des Essais de Montaigne*, Actes du colloque organisé par la Société Internationale des Amis de Montaigne les 9 et 10 juin 1995, en Sorbonne, réunis par Jean-Claude Arnould, Champion, 1996, pp. 39-53.
  - 9) グルネ嬢は1595年版『エッセー』の「序文」で、『エッセー』の言葉遣い、構成、自己描写、宗教に関する当時の人々の批判に対し、熱烈な弁護を行っている。
  - 10) Claude BLUM, « Les principes et la pratique : Marie de Gournay éditrice des *Essais* », *Marie de Gournay et l'édition de 1595 des Essais de Montaigne*, pp. 25-37.
  - 11) *Essais*, III, 9, Exemplaire de Bordeaux, f°425r<sup>o</sup>-v<sup>o</sup> (425は誤植、正しくは433) ; éd. de 1595, p. 124 (モンテーニュ『エッセー』(五)、原二郎訳、岩波書店、「岩波文庫」、1967、p. 338。訳語を一部変更させていただいた。)
  - 12) Robert ESTIENNE, *Dictionnaire françois-latin (1549)*, Genève, Slatkine Reprints, 1972.
  - 13) *Le Corpus Montaigne*, édité par Claude Blum, Champion/Bibliopolis S.A., 1998 で、名詞は単数形と複数形、動詞はすべての活用形を検索。パーセンテージは、0.5%未満で小数点以下を四捨五入すると0%になる場合を除き、小数点以下四捨五入。
  - 14) Ph. DESAN, *op. cit.*, pp. 99-101.
  - 15) Richard A. SAYCE, « L'édition des *Essais* de Montaigne de 1595 », *BHR*, 36 (1), 1974, p. 118 ; R. A. SAYCE and D. MASKELL, *A descriptive Bibliography of Montaigne's Essais, 1580-1700*, London, The Bibliographical Society, 1983, p. 28 ; Jean BALSAMO et Michel SIMONIN, *Abel L'Angelier et Françoise de Louvain (1574-1620)*, Genève, Droz, 2002, p. 266.
  - 16) Jeanne VEYRIN-FORRER, « Fabriquer un livre au XVI<sup>e</sup> siècle », *Histoire de l'édition française*, sous la direction générale de H.-J. Martin et R. Chartier, tome I, Promodis, 1982, p. 289.
  - 17) R. A. SAYCE and D. MASKELL, *op. cit.*, pp. 18-20.
  - 18) J. BALSAMO et M. SIMONIN, *op. cit.*, pp. 455-457.
  - 19) R. A. SAYCE, *op. cit.*, p. 119.
  - 20) Marie Le Jars de GOURNAY, « Préface sur les *Essais* de Michel Seigneur de Montaigne, par sa Fille d'Alliance », *Essais*, éd. de 1595, f°2r<sup>o</sup>-v<sup>o</sup>.
  - 21) J. VEYRIN-FORRER, *op. cit.*, p. 292.
  - 22) 1595年版の合計と1598年版の合計が一致しないのは、1595年版の大きな脱落

---

(I, 22) (一部の刊本ではカルトンで補正) と誤植が 1598 年版で訂正されるとともに、新たな誤植が生じたから。

- 23) Marie Le Jars de GOURNAY, *Le Proumenoir de Monsieur de Montaigne*, Abel L'Angelier, 1594. 検索のために参照したのは BNF, Z Payen 546 の画像ファイル。
- 24) Marie Le Jars de GOURNAY, *Le Proumenoir de Monsieur de Montaigne*, Abel L'Angelier, 1595. 検索のために参照したのは BNF, Z Payen 547 の画像ファイル。
- 25) J. BALSAMO et M. SIMONIN, *op. cit.*, p. 107 ; J. BALSAMO, « Marie de Gournay et la famille de Montaigne : les poèmes du *Proumenoir* et l'édition des *Essais* (1594-1599) », *Montaigne et Marie de Gournay*, p. 180.
- 26) J. BALSAMO et M. SIMONIN, *op. cit.*, p. 119.
- 27) J. BALSAMO, *op. cit.*, p. 189.
- 28) Lucien FEBVRE et Henri-Jean MARTIN, *L'Apparition du livre*, Albin Michel, « L'Evolution de l'Humanité », 1971, pp. 449-450.